
あの日の夏の約束 ~小学生編~

川大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の夏の約束（小学生編）

【Zコード】

Z6273C

【作者名】

川大

【あらすじ】

少年と少女はあの日の夏に約束をした。少年は約束を果たすために一生懸命練習をする。少女は約束を果たしてもらうために一生懸命応援をする。

プロローグ

「おつかれ！」

少年は壁に向かってボールを投げる
その綺麗なフォームから投げられるボールは中々速かった

「よーしー、これで……二振だ！」

また、壁に向かってボールが投げられる
ポンとボール跳ね返ってきて

「ねえー、まだ帰らないの？」

少女が少年に声をかける
少女が声をかけるのも無理はない、もう夕日が沈みかけているのだから……

「まだだよ、もひとつ練習しないと大きくなつてから、甲子園に行け
ないからなー！」

少年は少女の提案を無視してボールを投げ続ける

「もうー、甲子園、甲子園つてそんなに行きたいの？」

少女は怒りながら少年に聞いた

「おつかれー、甲子園に行くことが俺の夢だからなー！」

質問に答えながらもとても速いストレート投げる

「だったら、今度の日曜日おじさん連れつてもうこばっこじやん！」

「はあ～、そんなんじゃ意味がないよ～ 大きくなつて選手として
甲子園のマウンドに立つて
投げることに意味があるんだから！」

少年はボールを投げるのをやめ、少女に抗議をする

「えつ？ やうなの？」

少女は驚き、顔を横に傾けながら、また質問をした

「大きくなつてからつていつなの？」

少年は胸を張りながら言つ

「高校生だよー……つて、」の前テレビでやつてるのを一緒に見た
じゃん！」

先日のテレビの高校野球中継を見ていたようだ

「へえ～あれが甲子園だつたんだ～」

少女は何も知らないまま見ていたようだ
そんな少女に少年はあきれていた

「はあ～お前何も知らないまま見てたのかよ……」

「くくっ～～」

少女は苦笑いをしながら少年の顔を見る

「まあ、ここや……とにかく、俺は甲子園に行くんだー。」

少年は気合を入れて叫んだ

少女はそんな少年にあることを約束させようとした

「う～ん……甲子園に行くだけじゃ寂しいから私を甲子園に連れて
行くって
この約束しよー。」

「約束？」

「ああ！ 翁が甲子園に行くだけじゃつまんないし、寂しいから私も甲子園に連れてつてー！」

「まあ、それぐらいの約束してやつてもここぞ

「ホントー。ヤツタージやあ、指あつしよー。」

少女ははじかぎながら少年の小指と自分の小指を絡める

「あ～～びき～～づづ～～んま～～つ～～いた～～せんせんほんの～～ます
ゆびきつたー！」

「くくっ～～約束ちゃんと守つてよ。あ～、あと、約束守つてくれた

ら、私の恋人にしてあげる！」

少女は顔を赤くしながら少年に言った。

「ひつ、恋人！？ まあ、それはいいとして必ずお前を甲子園に連れつて俺のかつこいい活躍を見せてやる！！」

少年も顔を赤くしながら宣言。

「うん！ 約束だからねー！」

少年と少女はあの日の夏に約束をした……

プロローグ（後書き）

初めまして川大です！

小説は書くのが苦手ですが、皆さんに面白いといつてもうらげるような作品をつくりていきますのでよろしくお願いします！

第1話：新学期の始まり

陽気な天気で桜が舞う季節の4月、1人の少年が走っていた。

物は梅干し。これだけ
はホント食べられない
生名は 普通？ うむ 普通だー

そい、信じない！

あと、趣味というか大好きなことは野球!!!!　これは外せないなうん。
つて、こんな余裕こいて自己紹介してる場合じゃない！　早く学校に向かわねば！

ダーツシューリ

「ハア、ハア……なんとか……間に合つた……ふう！」

自分のクラスに入り席に座る。おっと、学校の紹介がまだだつた、ここは静岡にある夕陽丘ゆうひがおか小学校、丘の上にある学校で夕日が綺麗に見えるからその名がついたようだ。そして、今俺がいるクラスが5年3組のクラスだ。

俺が学校紹介しているところに顔見知りの女の子が来た。

「 ももー、遅こよ。今日から、5年生でしょ。しつかりしなきやー。」

と、説教してくる顔見知りは日和 千夏。俺の腐れ縁の奴だ。
まあ、俗に言う幼馴染だ。ここひとつは一年前の夏にある約束をした。
まあ、その話はまた後で

「 しようがないだろ、今日は父さんも母さんも、仕事で朝早くに家
を出でいったんだから」

そう、俺の両親はバリバリの仕事人間で年がら年中働いているので
ある。でも、大事なイベントの時などは仕事を休んで家族で過ごすいい両
親だ。

いつもは、俺が学校に行く時間に両親も出勤するのだが、今日に限
つて朝早くから
仕事が入り、起こしてもうえなかつたのだ。

「 はあー、ホントにあきゅやんは朝、起きれないよね。やつぱり、
起こしに行つてあげよつか?」

「 いや、それはさすがに遠慮させはひらつ。あと、あきゅやんついて
呼ぶなー。」

千夏に起こしてもうえなかつのは命がいくつあつても足りないくらいだ。
前に一度起こしてもうつた時は
本当に死ぬかと思った。……思い出しただけでも冷や汗が出てくる
……。

そして、あきゅやんとか千夏は俺のことを「あきゅやん」と呼ぶ。小
さい頃から呼ばれていたのだが、
流石に小学5年生ともなれば恥ずかしいものである。しかし、ここ

つは恥ずかしがるどころか、

積極的に呼んでくるのである。困った奴だ。

「ははっ、また、寝坊ですか晃？」

と、敬語で話しかけてくる男子は都築翔太。つげひろたさわやか系のナイスガイで、

女子にモテまくる野郎だ。こいつとは、近所の少年野球チームのタ陽丘バスターズでバッテリーを組んでいる。あつ、俺がピッチャーで翔太はキャッチャーだ。

「そりなんだよ～、あきちゃんがまた、寝坊したんだよ。都築君も何か言つてあげて」

「ふむ、それはいけませんね。晃、やはり、日和さんに起こしてもううのはどうですか？」

「それだけは絶対に嫌だ。翔太、前にも言つたろ千夏の起こし方は命がいくつ戻ても足り

ないって、お前が起こされてみるか？」

「…………そりですね。やめておきましょう。僕もあの方法はござ勘弁願いたいです。」

「えへへ、そんなに酷くないよ～。あきちゃんの に を突つ

「やめてーー、言わないで

——「…………わかったよ～、もつ、あの方法で起こせなこよ

ありがとうございます。千夏さん。

「さて、そろそろ始業式が始まるので、体育館に行きましょうか」

「うん、そうだね。ほら、行くよ。あきちゃん！」

「はあ～、だるいけど行かないとな……」

教室を出て3人は体育館へと向かった。

始業式終了後……

「はあ～、やつぱつあの校長の話は長すぎたな……」

「ハハッ……まあ、しちがないよ。校長先生、話すこと大好きだから

「でも、今日はほら、担任の先生の連絡で終わりですから、もう少し頑張りましょっ」

「そうだな！ 翔太、学校終わつた後練習つてあつたけ？」

「はい、ありますよ。昼食食べ終わつたら後ですか、午後2時くらいからですね」

「よつしゃー！ 今日も気合を入れてやるぞー！」

今日もたくさん投げてやるや～

「晃。今、今日もたくさん投げるって思ってましたよね」

「ピクッ！～

「ソ、ソンナコトナイヤ」

「はあ～、練習熱心なのはいいですけど、オーバーワークは禁物ですよ。まだ、小学生なんですから焦らないで練習しましょう。肩を壊してからでは遅いんですから」

「わ、わかつてゐよ。無理はしない」

何で～いつは人の心を読むことができるんだ……。ハッ！ もしかして、翔太は超能力者だったのか！

「ちなみに、僕は超能力者ではありませんよ」

「なぜ！？ なぜ！？ わかるの～？」

「はいはい、2人ともふざけてないで先生が来たから、席に着席しよ

「お～い、お前ら席に着けよ。ホームルーム始めるぞ」

そんなこんなで今日の学校は終わった……

第1話・新学期の始まり（後書き）

やっと一話目が書き終わりました……。この調子でバンバン更新していくたいと思います！感想などもお待ちしております！

第2話・夕陽丘バスターズ

「よつしゃー、練習だ！」

学校が終わつた後、昼食を食べた俺は少年野球の練習があるため、夕陽丘小学校のグラウンドに向かつていた。

俺の所属している、少年野球チームの名前は夕陽丘バスターズ。去年出来たばかりの新しい

軟式野球少年団だ。小学3年生までお遊び程度で俺は野球をやつていたのだが、3年生の夏に見た高校野球にすっかりはまつてしまい、4年生になつて本格的に野球をやりたいと思ったのだが、近くに野球チームがなかつたので、一緒に野球して遊んでいた翔太を誘いチームを作ることにした。

しかし、小学生だけでは出来なかつたことなので、野球に詳しい翔太の父さんにチームの監督をやつてもらうように頼んだところ、快く引き受けてくれるどころかおじさんは張り切つてしまい、

「目標は日本一だ！」と言つて燃えてしまつた。

チームを作つた後は、メンバー集めだつたのだが……本当に苦労した。間違えた……しているだ。

チーム結成から1年経つたのだが、人数は未だに8人である。だから、去年は公式戦の大会はおろか練習試合もできなかつた。当然、今年は試合を……と言いたいところだが、さつきも言つたとおり、メンバーは未だ集まらず。

「はあー、早くメンバー集めないとな……」

あと、1人なんだけどな……。そのあと1人が集まらない。困つた
ものだ。

そんなことを考へて、いのちに学校に着いた。

学校にはすでに都築親子がいた。

「ハアーハツハツハハ！ ここにちはだ！ 晃よ！！」

「バン！ バン！ と、俺の背中を叩いて豪快な挨拶をしてきた、この人が翔太の父、都築 益次郎さんである。190cmを超える大柄な体格で、豪快な性格が特徴の人物だ。

「痛いっ！ 痛いですよ！ 監督！」

「ガーハツハツ！ これくらいで、嘆いているようではまだまだだな！！」

自分の体格を考えてやつてくれよ……。痛すぎるよ、トホホ……。
と、痛がっているところに

「こんにちは。晃

翔太が話しかけてきた。

「翔太あー、監督をなんとかしてくれよー」

「すみません。僕では絶対に父さんは止められませんから、諦めて
ください」

についりとさわやかな笑顔で断られてしまった。

まあ、あのおじさんだからな……

そうしているうちに、ぞろぞろと他のメンバーもやつた来た。
その中の一人が声をかけてきた。

「よお～。晃、翔太」

「あつ！ たつちゃん、ヤッホー」

「村重さん。こんにちは」

この人は俺の1つ年上の小学六年生、村重 大我。むらじか たいが

六年生で身長が170cm近い大柄な体格でチームの四番だ。
ポジションはファーストである。ちなみにキャプテン。

おちゃらけた性格というか、静岡で生まれて、育つたのにエセ関西弁をしゃべる変わった人物だ。

去年、チームメイトを募集しているときに1番最初にチームメイトになつた。

「あいかわらず、晃は元氣で翔太は丁寧ちゅーかお堅い奴やなあ～」

「人間元気が一番だからな！」

「フフッ……これが僕ですから」

「まあ、人それぞやからなあ」

「そいやー、昨日のプロ野球中継でな……」

「なになに～」

「それなら、僕も見ました」

と、野球の話をしつづると

「おーいっ！ お前ら、そろそろ練習始めるがねー。」

監督が大きな声で声をかけてきた。

「 おーいっ！ お前ら、そろそろ練習始めるがねー。」

俺たちは監督の下へ駆け寄る。

「 よーしゃー まずはアップからな。大我、頼んだぞ」

「 まかしどきー。」

と、並んでたしゃんがみんなをまとめた。

「 ハンニーランニングやるから、整列ー。」

みんなは2列に並ぶ。

「 よーしゃー みんな、行くでえー。」

「 おーいっ！ お前ら、そろそろ練習始めるがねー。」

みんなが気合を入れて返事をする。

この後、ランニングをやり、柔軟、ダッシュなどをやつた。

「監督う〜、アップ終わりました！」

たつちゃんが監督に報告をしこに行くと、監督が指示を出す。

「よし〜！ 今日はノックからやるぞ。晃と翔太はピッティング練習
！」

「「「「はい〜！」」」

いつもして新学期最初の練習が始まった。

第2話・夕陽丘バスターズ（後書き）

やっぱ、小説書くのは疲れますね……
でも、がんばっていきます！－！

第3話・綺麗なフォームですね

バンツツー！

気持ちのいい音がミットから響く。
俺は今ピッチング練習中だ。

「ナイスボールです。晃」

「へへへ、今日も絶好調だぜ」

と言いながら、次の投球に移る。

バンツツー！

小学生とは思えない速球がまたミットに収まる。

（つうーーー！　あいかわらずすごい速球ですね。　110後半から120キロは確実に

出ています。本当、小学生の球じゃないですよ……。しかし、晃はきれいなフォームで

投げますね。ワンインドアップから投げられる彼の美しいフォームは全国の投手の

お手本と言つていいほどだ。それに加え、恵まれた体のつくりである。晃は柔軟でムチ

のよじこじなる腕、がつちつとした足腰、本当に天性の賜物である。

晃の才能がひらやましこです……）

「おーいっ！ どうしたんだ？ 早くボール返せよ～」

ボーッとしている翔太に声を掛けた。

何やってんだ翔太？

（おつと……。僕としたことが考えすぎましたね）

「はーい。すみません、ちょっと考え事していました」

「珍しいな。翔太が練習中に考え事なんて」

「いえ、あいかわらずすごい速球を投げるんだなと思いまして」

一矢「りと笑いながらボールを返す。

「やつか？ 僕はそんな風に感じないんだけどな」

「うーん……。周りに比較する奴もいないし、第一に他の小学生のピッチングを見たことないから自分がすごいなんて思ったこともない。まあ、テレビでやつてる野球中継のプロ野球選手とは月とスッポンの差だとは感じる。

「晃はす」にですよ。晃がいれば全国大会も夢ではないです

「へへっ……。ありがと」

晃は指で鼻をかきながら照れた。

「よし！ 翔太にほめてもうたとこで練習を再開するか！」

晃は氣合を入れなおし、ピッキング練習を再開する。

「 セリですね」

きれいな青空の下、再び氣持ちこころシートの音が響く。

第4話：あたしが入る？

キイーンコオーンカーンコーン

「ユーリー！ 今日の授業はここまで。そのまま、SHRをやめなさい。連絡事項なし。気を付けて帰れよ。それじゃあ、解散！」

担任の先生が号令を掛けて、今日の学校が終わつた。

「あーつ！ やつと、終わつたー。」

晃は体を伸ばしながら、リラックスした。

あきちゃん、帰ろー

千夏が晃の席に近づきながら、声を掛ける。

「そうだな……翔太、帰る？」

一
はい。
わがりました

そばにすくに帰りの支度を始めた

「あつ！ あわひせん、今日は用事があつて途中までしか帰れないんだ」

うん?
そうなのか?
それじゃあ、しかたないな」

「うん、こめんね」

胸の前で手を合わせながら、かわいく謝つてきた。

「まあ、気にするな」

千夏のかわいいポーズをまったく気にしない晃であった。

（うう～、こんなかわいいポーズをしてるのに何で気にしないのよー）

憐れな千夏であった。

「晃、日和さん。帰り支度が終わりましたので、行きましょう」

そうしている内に帰りの支度を終えた、翔太が声を掛けてきた。

3人で下駄箱を出て、校門前に差しかかった時、校門前には翔太の父さんがいた。

「ハーハツハツ！ 3人とも今日も一日お疲れ！」

「あれ？ 父さんどうしたんですか？」

当然の疑問だ。監督はまだ仕事の時間なのに小学校にいるのだから。

「つむ、今日は仕事が早く終わってな、それでたまには家族で外食をしようと思つてなー。」

なんとまあ、いい親父さんじゃないか。家族のことを第一に考える……泣けるねえー。

「わかりました。……晃、日和さん。申し訳ありませんが僕はここまで……」

困った顔をしながら、俺たちに言つてきた。

「いや、気にするな。家族でおもこいつきり楽しんで来いー。」

「そうだよ。家族水入らずってね

俺と千夏は笑顔で翔太に言つた。

「ありがとうございます。では、いいでよくな。晃、日和さん

さわやかに挨拶をして親父さんと帰つてこつた。

「あたし達も帰ろつか

(やつたー。あきぢやんと2人つきつー。)

「ねつむー。」

俺と千夏は下校の真っ最中。

「まだ、チームの人数が集まつてないんだよね？」

「はあ～、そ、うなんだよな……。あと1人なんだけど……。そのあと1人が集まらないんだ」

そう、新学年が始まってから3週間。あと1人のメンバーがまつたく集まらない。

深刻な問題だ。夏の大会まで、あと2ヶ月ちょっと、今年こそは大会に出たい。

「あきちゃん……。なんだつたら、あたしが……入るつが？」

（チームに入れば、あきちゃんと一緒にいる時間が増えるー）

「えつ！？ いやいや、お前野球できないだろ」「

千夏の奴、なに考へてるんだ？ まったく、野球できないのに？
あつ、あつ！ 野球に興味をもつたんだな！

うんうん、いい事だ。

「そ、うか！ 千夏、やつと野球に興味をもつて、チームに入らつて決めたんだな！」

「えつ！……いや……そ、うじやないんだけど……」

(「へ、あきゅあとー緒にいたいから入りたことにならへんこよー」)

「あじゅ、違うのか? じゃあ、何で?」

「えへ、えへとね……。あへと……、うへんと……。」

「うさへ、ビウした?」

「何だ? 千夏、急に黙つたりして。」

だからー。」
「や、や、ま、チー、ムこ、入るのやめるね。あ、あたし、い、い、ま、で

「あ、あ

千夏はチームに入るのをやめにした。おひこひひかる。

「お、お、千夏」

「バイバイ。あきゅあんー。」

あつそつと帰つていった。

「何なんだ、あいつ……」

よくわからぬ千夏であった。

千夏と別れた俺はメンバー集めについて再び考えていた。

「うーん……。ホント、あと1人なんだよな……」

と、齒んでいて、空き地を通りうとした時……

スパーーン！

何か音が聞こえてきた。

「うん……」の音は？

音は空き地の方からする。

「……行つてみるか

俺は空き地へと向かつた。

第5話・9人目！？

晃が空き地に到着した。

「うへん……。この空き地から音がしたよな……？」

俺が空き地の周りを探していくと……。

「えつ……」

手にグローブをつけ、壁に向かってボールを投げている少女を見つけた。

ビュッ！ スパーン！

腰まである綺麗な黒い髪をなびかせ、鋭い腕の振りでボールを投げる少女の姿は本当に綺麗だと思った。

「す」「……」

俺がそう声を出すと、少女は俺の声に気づいたのかボールを投げるのをやめてこちらを向き、声を掛けってきた。

「何か用か？」

「えつ……！ あ、あの、その……」

急に声を掛けられたので、俺は何を答えて言いのわからなかつた。

「もう一度言つ。何か用か?」

少女は再度聞いてきた。

「あ、ああ。ボールの音がしてここに来てみたら、君が綺麗なフォームでボールを投げていたから、おもわず見惚れていたんだ」

少女の意志の強そうな瞳で見られたためか、自分の心の中が全部見られてしまつと思つたので、嘘もつけなく正直に答えてしまつた。

「むつ……、そ、そつか

少女は頬を赤く染め、黙つてしまつた。
今度は少女が答えられなくなつてしまつた。

そんな少女に俺は聞く。

「野球やつてるのか?」

「ああ、やつてこる……といつかお遊び程度だ」

元の頬の色に戻つた少女はそう答えた。

「遊び? チームには入つてないのか?」

「入つていない。近くにチームはないし、仮にあつたとしても……」

「じつも?」

少女は寂しい顔をしながら、続きを答えた。

「私みたいな女子をチームに入れる」とはない……」

「…………」

「前に遠くにあるチームに入りたいとお願いして言ったのだが、チームの監督にお前みたいな女に野球ができるかと言われ、断られてしまった」

無理やり笑顔を作り、俺に話してくれる。

俺は言葉を失うと同時に怒りが湧き上がった。
なぜ、こんなにも野球が好きな子が女というだけで野球ができなくなってしまうのか？

俺はこの子に何かしてやれないのか？

「それに私みたいな下手なやつが野球をやつしてもしょうがないのかもな……」

俺はその言葉に過敏に反応した。

「そんなことない。君は全然下手じゃないな」

「慰めは……」

「慰めなんかじゃない！」

「つ……」

「あつ……、『めん……』

おもわず大声を出してしまつた。でも、さつき遠くから彼女のピッチングを見たけど、本当に彼女はすごい実力を持っていると思う。だから、俺は彼女にこんな提案をした。

「じゃあ、俺と勝負しないか？」

「……勝負？」

少女は首を横に傾けながら聞き返してきた。

「ああ、俺と君で一打席勝負するんだ。ちなみに君がピッチャーで俺がバッター」

「し、しかし……」

「だあああ——、うだつだ言つてないで勝負——」

「わ、わかった……」

有無を言わわぬ、勝負させる。

俺は地面に落ちていた少女のバットを拾い左打席で構える。

「よーしー、いつでもいいぞー。」

「わかった

「本氣で勝負しろよ」

「ああ、勝負する以上、本氣でやりますわ！」

わあーて、わしき見た限りでは結構早くストレートを投げたよな。
まあ、でも1球目は様子を見るか。

少女はノーウイングアップから投げてきた。

「打つてみるー！」

「おおっーーー！」

俺は1球見逃したけど、とても速いストレートが内角低めギリギリ
にきた。

な、なんていうか打てない！？「こんな速いとは聞いてないよーー
で、でも、なんとか当てないとな。

「や、やばいな。」れ……

「どうした、少年？ 怖氣づいたか？」

余裕の発言をしてくる。わしきもどうじじじしてたくせー。

「少年って……。同じ年くらこ見えたの？」

「わあ、次いくぞー！」

「ピュッー！

次は外角低目か！ でも、打てる！

カキイン！！

ボールはバットには当たったが、ボールはキャッチャー方向に飛んでいった。

つまり、ファールだつたのだ。

「くつそー、タイミングはばっちりだつたのに！」

少女は驚いた顔をしていた。

「今の球を当てるのか？ 私にとつては最高のボールだつたのに！」

さあ、次の球は何だ？ 内角？ 外角？ それとも、1球外していくか？

「さあ、次来い！」

「くつ！」

少女はノーワインドアップから3球目を投げた！

ビュッ！

やつぱり、1球外してきたか！

晃は見逃そうとする。

しかし、球は晃の考えを嘲笑うかのようにボールゾーンからストライクゾーンに入ってきた。

「えつ！」

晃は球を見逃した。
結果三振。

また、ハットが振れなかつた。それもそのはず、スピードで変化してきたのだから。

「なんだ、今のボールは?」

高速スライダーだ

少女が晃の疑問に答える。

「そうだ」

「ううううう」

「ん?
どうかしたか?」

晃はうつむいたまま、唸つてゐる。それを不思議に思った、少女は晃の顔を覗き込もうとした瞬間……

いきなり大声を上げた。

「さあやめ！」

少女はびっくりしてしまい、尻餅もついてしまった。
それをまつたく気にしない晃は少女に話し掛ける。

「す」「いよ、君…… あんなスライダーが投げれるなんて！ しかし
も、ストレートもなかなかいい
し！」

「え？、あ、ありがとう……」

急にたくさんほめられた少女は顔を真っ赤にしながらお礼を言った。
(「……こんな風に言われたのは初めてだ。しかも、こんなに私のことを見てくれる人も始めてだし……。私、この男の子と一緒に野球がやつてみたい……」)

「やうだ！ 僕と一緒に野球やうづぜー！」

「え？ー！」

俺はおもわず、そう声を掛けていた。「この少女と一緒に野球をやることが俺が唯一少女にしてやれることだと思ったから。

「俺の入っているチーム、夕陽丘バスターズに入ってくれー！」

「…………」

(「私はこの男の子と一緒に野球をすれば私は変われる……。それに私は彼の事が……。迷うことはないー！」)

「ああ、一緒にやうづー！」

少女の笑顔は本当に輝いていた。

「よっしゃー！…………って、まだお互いの紹介もしてなかつたな……。俺は晃、椿野 晃。君は？」

「私は宇佐美 瑞奈うさみ るなだ」

「これからよろしくな！ 瑞奈！」

「ああっ！ 晃！」

こうして夕陽丘バスターズに9人目のメンバーガ集まつた……

第5話・9人目！？（後書き）

感想や評価をしてくれると執筆向上につながりますので皆様ご協力
お願いします。

舞台設定・人物設定

物語の舞台
静岡の風光市 夕陽丘町という場所が物語の舞台。

夕陽丘町はほぼ静岡の中央部に位置する。

周りはほとんど田畠で隣町はいろいろと都市化として発達している。

時代設定

この小学生編では平成12年（2000年）が時代設定となっている。

人物設定

椿野 晃 10歳 小学5年 7月13日生まれ

左投左打 投手・外野 オーバースロー

この物語の主人公。少しお調子者で野球大好き少年。投げることが大好き。

小学4年のときに高校野球を見て本格的に野球をやり始めた。
恵まれた野球の才能を持ち、小学5年にして球速が120キロを計測する。

しかし、変化球が投げられず（監督に変化球を覚えるのを反対されたため）ストレート一本のみ。

バッティングも非凡な才能がある。

小学4年の夏に千夏を甲子園に連れて行くと約束する。

日和 千夏 10歳 小学5年 8月3日生まれ
この物語のヒロイン。

主人公の幼馴染で家が近所。基本的にのんびりな性格で世話を焼き。主人公のことが好きだけど告白できずにいる。

小学4年の夏に晃に甲子園へ連れてつてもうつと約束する。この約束が果たされたら、彼女は主人公に告白するつもり。だから、千夏はこの約束をものすごく大事にしている。

宇佐美 瑞奈 10歳 小学5年 11月24日生まれ

右投右打 投手・外野 オーバースロー

この物語のもう一人のヒロイン。

主人公とは空き地で出会う。ちょっと姉御肌な性格……かも？主人公とは違う学区に住んでいるため、通っている学校は違う。空き地で出会った時、主人公に自分のピッティングをほめられ、チームメイトになる。

ストレートの速さは晃に及ばないが、それでも100後半から110キロのスピードが出る。

瑠奈の一番の武器はストレートとほぼ同じスピードで曲がる、高速スライダーである。

しかし、スタミナがなく先発ができないのが欠点。

バッティング技術は普通である。

主人公に惚れ始めている。

都築 翔太 10歳 小学5年 1月12日生まれ

右投左打 捕手

主人公の親友。冷静でどんな場面でも落ち着いて物事を判断する正確。

主人公とは小学3年からの付き合い。

捕手としての能力も高く、強肩でキャッチングもよく鋭い洞察力もある。

足が速く1番バッタータイプ。小技もうまい。

村重 大我 12歳 小学6年 4月7日生まれ

右投右打 一塁手

主人公の1学年上の先輩。

主人公とは小学5年からの付き合い。

夕陽丘バスターズの4番バッター。

都筑 益次郎 37歳

都筑翔太の父親。夕陽丘バスターズの監督。

豪快な性格。

第6話・予想以上だ！

桜の木の花びらが散り、新緑の葉に変わった、5月……

ゴールデンウィークの真っ只中、だが、今日は練習の日。今日から、瑠奈が練習に参加するため、俺は瑠奈と待ち合わせと一緒に学校まで行くことになっていたので、待ち合わせの場所に行く途中だった。

なぜ、待ち合わせまでして一緒に行くのかといつと、瑠奈は俺たちは違う学区の学校出身であつたからだ。道理で俺の学校では見かけない子だなと思った。学年は俺と同じ小学五年。これもほとんど予想道理だった。

「てな訳で、待ち合わせ場所に移動中～」

「つて……、誰に言つてんだ俺は……？」

そんな事をしている内に待ち合わせ場所に到着！

「ああ～つて、瑠奈はいるかな？」

俺は周りを見渡すが瑠奈の姿はどこにもない。

「はあー、遅刻かよ……」

今時間が9時3分。ちなみに待ち合わせの時間は9時である。完全な遅刻だ。うん……？ そうすると俺も遅刻か？ まあ、いいや。先に来たんだし。

練習の開始時間が10時からだから、まだ余裕があるからいいんだけど。

20分後

「すまん、すまん、遅れてしまった」

瑠奈は20分送れて来たのにもかかわらず、自分には悪気があります
せんみみたいな笑顔で俺に声をかけてきた。

「すまんじゃないよ！ 20分も遅れて！」

「いやいや、本当にすまなかつた。お詫びにそこで買つてきた、ス
ポーツドリンクをあげるから」

そう言つて、冷えたスポーツドリンクを俺にくれた。

「つたぐ、「クッ」「クッ……」

文句を言いながらもスポーツドリンクを飲む俺。
いや、勿体無いだろせつかく貰つたんだから。

……何で、一人でノリツツ「ミ」してゐるんだ。つーむ、今日の俺は何
か可笑しいな……。

そんなことを頭の中でやつてゐると瑠奈が……

「フフッ……こんなやりとりをしていると恋人つて感じがするな……」

「……」

「ブフツ……」「ホツ、」「ホツ……」

とてもとても変な冗談を言つてきた。

「「ホツ……、お、おい！ いきなり変な事を言つな！ ビックリして吐いちゃつたじゃないか！」

「ハハツ！ 晃、いいぞ！ そのリアクションを待つてたんだ」

瑠奈は手でお腹を押さえながら笑つていた。

「……もしかして、これをやりたいが為にスポーツドリンクを俺にくれたのか？」

「ああ、晃はウブだと思ったからな。こうこう事をすれば、私の予想道理のリアクションをしてくれると思つていたんだが、予想以上のことをしてくれたから、満足、満足」

小悪魔の笑顔で喜んでいる瑠奈。

「こつ……、やつてくれるじゃないか。後で覚えてろ、仕返ししてやる。

「ちなみに仕返しをするんだったら、それ相応の覚悟をしてやれよ

「「ハツ！」

「何で、仕返しするつて分かつたんだ！？ 僕の周りはやっぱ、H-Sペーだらけだったのか！？」

「私はエスパーではないからな」

「ヂキッ！」

だから、何で分かったの！？ ヤベエ……、俺ももう心や頭の中で何もできない……。

「フフフ、晃は顔に出やすいからな。分かりやすくていい

「えつ、そうだったのか？ 道理で他の奴らにも俺の考えてることが分かったのか。今度から気をつけよ

「そうだな。といひでいつになつたら、学校へ案内してくれるのかな？」

「あつ！ そうだった！ 今、何時だ？」

時間を確認したら、9時半。11時から学校まで15分くらうだから十分間に合ひうな。

「まだ、間に合ひ時間だから、行ひ

「ああ、案内頼む」

そんなこんなで学校に向かつた。

第7話・恋人！？ライバル！？

無事、瑠奈を学校に案内できた。その後、瑠奈をみんなに紹介するが、その時に……

「小学5年の宇佐美 瑠奈だ。みんなとは違う学区だが、よろしく頼む」

と、普通の自己紹介をしたと思った。しかし、そんな甘い考えを持つた俺が間違いだった。

「ちなみにそこ」の椿野 晃とは恋人同士なのでその辺もよろしく

すごい爆弾を投下してきた。

「お～い、瑠奈～。そんな、嘘をついちゃ、メッだよ～。

すごい爆弾を投下したせいか、俺の思考も爆弾に攻撃され、おかしくなってしまった。

「「「「」.....」」」

一瞬みんなの時間が止まった後、

「「「「えええっつ-----」」」

みんなで一斉に声を出した。

いいねー、みんな息が合ってる。野球のチームプレイでメンバーの息が合つてるつて大事だからね。

つて、こんな香氣にしてる場合じゃない！－！ みんなに説明しなきや！

「みんな、違うんだ！ 瑞奈とはそんな関係じゃない！」

「「「「瑞奈あ……」「」「」

ヤベホ……、何か知らないけど、せひにみんなに誤解を取ったみたいだ……。

どうしよう……。どうすれば、みんな分かってくれるんだ……。

と、考えていたと……

「なんや、晃。恋人があるなら、おると話してくれや～

たっちゃんがからかい気味に話して来た。
なので、違つと話すとした時に、

「晃、僕は日和さんが恋人だと思つていたんですが、すでに宇佐美さんという恋人がいましたんですね……。晃、お幸せに」

翔太も訳の分からないことを言いながら、話しかけて来た。って、翔太は俺と千夏のことをそんな風に見てたのかよ。

しかーし！ 断じて違うぞ！ 僕と千夏は恋人なんかじゃない！
……だから、こんな事してる場合じゃないんだ！ みんなにちゃんと説明しないと…

そんなこんなで俺と瑞奈の関係を説明するのに30分くらいの時間を要した。

まあ、みんな最後にはちゃんと納得してくれたからよかつたんだけど。

その後、すぐに練習を開始した。

練習後……

「あきらめーん！」

練習が終わった後、千夏が声を掛けて来た。

「ん？ 千夏、練習見に来てたのか？」

「うん、たまたま学校の近く通つて、今日練習の日だつて思い出しだから、見に来ちゃつた」

千夏は「ひして、時々練習を見学しに来るのだ。

「そつか、じゃあ、一緒に帰るか？」

「うんー。」

千夏と一緒に帰るつとしたのだが……

「晃あー。」

大声で瑠奈が俺を呼びながら近づいてきた。

「どうした、瑠奈？」

「ああ、行きにここまで道のり案内してもうつたが、まだつる覚えだから帰りも案内頼めるか？」

「ああ、そういうえば行きに案内したつけな。まあ、まだ一回しか通つてない道だからな。しつかりと道順なんて覚えてないか。」

「おう、分かった。待ち合わせた場所まででいいか？」

「それで十分だ。お願ひする」

瑠奈と話していたら……

チヨンチヨン

と、俺の服の裾を千夏が引っ張つてきたので、振り返ると

「あきちゃん……、随分と仲良さう話してゐるけど……、その子は誰かな～～？」

そこには笑顔の般若がいた。

「えつ……、えつと……、千夏さん？ どうかなさいましたか？」

あまりの恐怖に俺は敬語になってしまった。

「だ・か・ら・そ・の・じ・は・だ・れ！」

もつと、恐くなつたよ。マジでちびつそら……。

「あ、ああ、」こつせ……」

かなり、ジビリながらも事情を説明しようとしたら……

一私は冕の恋人だ

瑠奈が本田2度目の爆弾を投下を開始した。

- 1 -

みんなと囁きようじ千夏の時間が一瞬止まつた後、

えええ――――――

みんなと同じやうなリーアクションをした

「ねえ!! あきちゃんどういうことなの!! 恋人ってどういう

大蔵を叫び、そして、俺の首を絞めながらの真意を聞くハシゴだつてやった。

「あきちゃん！ あたしは遊びだつたのー？」

千夏は混乱しているのか、訳の分からぬことを言い始めた。
それにしても……。マジキツイデス、チナツサン。

「まあまあ、落ち着きたまえ」

さすがにやばいと思つたのか瑠奈が千夏を止めた。

「すまん、すまん。恋人といつのは私の冗談だ」

「えつ……。冗談……？」

千夏は俺の首から手を離しながら呟いた。

「せう、冗談だ」

「つたく、恋人なんてあるわけないだろ。冗談を真に受けるな」

俺は首をさすりながら呟いた。

「うへ、うへへ。だつて、だつてへへ」

「第一、俺のことが好きな奴なんているわけないだろ」

「「…………」「

千夏と瑠奈は黙つて啞然とした。

「ん？ どうした、2人とも？」

「「はあ～～」「

今度はため息をつき始めた。

何だ、何だ？ 2人ともどうしゃつたんだ？

「 もう、いいよ……。それでこの子とは恋人じゃないんだね？」

「 ああ」

「 じゃあ、紹介してよ」

「 そうだな。ここには宇佐美 瑞奈。この前、偶然に会つて野球やつけてることだから、今日からチームに入つてもらつたんだ」

「 へえー、そうだったんだ」

「 ああ、んで、瑞奈。俺と今話してるのが、幼馴染の日和 千夏だ」

「 うむ。日和さん。よろしく、私のことは瑞奈でいい」

「 うん。私も千夏でいいよ。瑞奈さん。」

2人とも握手をしながら、お互い挨拶をした。

「 あつ、あと、ちょっとこっちに来てくれないか？」

と、瑞奈は千夏の手をとり、晃から離れていった。

「 ん？ どうしたんだ、あいつら？」

晃は何にも分からなさうに呟いた。

晃から離れた2人は……

「どうしたの、瑠奈さん？」

「ああ、単刀直入に聞く。千夏は晃のことがすきなのか？」

「えつー！あの……、えつと……」

千夏は顔を真っ赤にしながら慌てている。

「どうなんだ？」

「えつと……。うん、好きだよ」

相変わらず、真っ赤な顔で返事をした。

「そうか。やはりな……」

瑠奈は納得しながら頷いた。

「瑠奈さんはどうなの？」

逆に今度は千夏が聞いてきた。

「うー……。私が、私は……」

瑠奈は少しの間、考えこつ答えてきた。

「私も好きだな」

「そっかあ」

千夏は寂しそうに笑いながら返事をした。
そんな顔を見た瑠奈が、

「千夏、今日から私たちは友達兼ライバルだ」

と、言つてきた。

「えつ？」

いきなりのことについていけない千夏は返事ができなかつた。

「私と千夏は晃のことが好きだけど、互いにその気持ちを相手に譲ることができない。けど、それ以外のことでは君とたくさん仲良くなりたい。だから、友達兼ライバルだ。なつ？」

瑠奈は笑顔で千夏に同意を求めてくる。
その提案に千夏は、

「うん！ そうだね！」

瑠奈と同じように笑顔で答えた。

こうして、2人は友達兼ライバルの最高の親友同士となつた。

第8話・遊園地へ行けりやおー！前編

「ゴールデンウイーク最終日。」

俺と千夏と翔太と瑠奈で遊園地に来ていた。夕陽丘町からかなり離れた場所にあるので、電車に乗つてここまでやつて来た。遊園地の名は「T D D L」（とんでもなく「だめだめランド」という、遊園地については絶対にダメだろうと思われる名前である。しかし、名前とは裏腹に客入りは上々で日本一人気の遊園地として家族やカップルには人気のスポットだ。なぜ、俺達4人がこの「T D D L」にいるかというと……

前日

まつたりと漫画を読んでいた夜に電話が掛かってきた。

「晃～。都築君から電話よ～」

「階から母さんの呼び出しきくらつた。漫画がいい所だったのだが、渋々、一階へ降りつてつた。」

「こんな夜に翔太の奴、何の用だらう？」

電話の受話器を取ると、

「もしもし、夜分遅くに申し訳ありません。晃

丁寧に謝つて來た。

つていうか、親友に対しても丁寧すぎるぞ。翔太、……。
まあ、今更なんだけどな。

「いやいや、気にするな。それで、どうかしたか?」

「ええ、先日、親戚の叔母からTDDの1日フリーバス券を4枚
頂いたので、
お誘いしに電話しました」

「えつ！？ マジで！？ TDD」って日本で一番人気の遊園地じ
ゃん！ そのフリーバスを4枚くれるなんて氣前のいい親戚さん
だな～。それで、俺と翔太で2枚だから……残りの2枚は？」

「あ～、それは日和さんと宇佐美さんをお誘いしようと思つて
いる
のですがどうです？」

「おお、いいんじゃない？」

「そうですか。では、僕は日和さんをお誘いするのでもう宇佐美さ
んをお誘いしといてください。僕は宇佐美さんの連絡先を知りませ
んので」

「オッケー。わかった。集合場所と時間は？」

「じゃあ、朝の9時に駅前に集合で」

「了解。じゃあ、また明日な」

「はい。では、また明日。おやすみなさい」

「じつ出來事があつたからである。

現在、俺達は遊園地の入り口でざわつてまわらひつか相談中である。

「私はこの絶叫エリアという所に行つてみたい」

「そうですね。僕もそのエリアがいいです」

瑠奈と翔太が絶叫エリアに行きたいと言つている。
しかし、俺と千夏は……

「ダメ、ダメ……。メルヘンエリアが絶対にいいに決まつてゐるよ~」

「違つ、違つ~。ここはやっぱ恐怖エリアで涼しくなるぜー~!」

と、俺達は違うエリアに行きたいと思つている。
俺達が言つてゐる、エリアとは……

この遊園地は絶叫エリア・メルヘンエリア・恐怖エリアの3つのエリアに分かれて構成されている。絶叫エリアはジェットコースター

やフリーホールなどの絶叫マシンがある。メルヘンエリアはメリー「ゴーランドや観覧車などのアトラクションがある。恐怖のエリアはお化け屋敷や迷路などのアトラクションがある。

あーだ、Jーだと20分近くみんなで議論していると翔太が意見を出した。

「こんな事ばっかり話していくても一向に行き先エリアが決まりませんのでジャンケンをして行き先エリアを決めましょ~」

「そうだな。それなら公平だな」

「うん。勝つてメルヘンエリアに行くよ~」

「おっしゃー！ ゼッテー勝つぜー！」

みんなが意気込み自分の利き腕を出す。翔太と瑠奈は行き先エリアは同じだから瑠奈が代表してジャンケンをする。

「「「ジャーンケーン……」」

「「「ポンー……」」

こうして行き先エリアが決まった。

第8話・遊園地へ行けやおー！前編（後書き）

更新が何ヶ月も遅れて申し訳ありませんでした。
これからはしっかりしていきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273c/>

あの日の夏の約束～小学生編～

2010年12月14日22時15分発行